

保育者の専門性に関する研究動向

草信 和世

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【目的】 保育者の身体的行為に焦点を当て、言語化されていない保育者の専門性の言語化を試みる研究の研究デザインの動向を明らかにする。

【方法】 身体・からだ・身体知・身体性・身体行為・身体感覚・動き・動作・立ち居振る舞い・振る舞い・ふるまい・仕草・所作・表情・視線をキーワードとし、保育者とのアンド検索及び保育者と専門性とのアンド検索を行い、学术论文を抽出し検討した。データベースとして CiNii（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ）を使用し、2018年より2025年3月までを対象とした。

【結果】 該当する論文が少ないこと、身体関連用語の定義が明示されないことがあること、多様な研究対象・データ収集方法が選択されていること、保育者の微細な身体的行為である仕草への言及がないことが示唆された。

【考察】 保育者の身体的行為に焦点を当て、言語化されていない保育者の専門性の言語化を試みる研究には、研究デザインの検討が重要であることが推察された。

【キーワード】 保育者の専門性, 身体的行為, 研究動向

I. 問題・目的

1. 研究課題

近年、社会の急激な変化に対応して、保育者の役割が拡大している。加えて、保育者の定義自体も拡大している。大学等のカリキュラムを経て、資格・免許を得た者が専門家として認められ保育者と呼ばれた時代を経て、現代では、わずかな研修や時に専門的なトレーニングを受けることなく、保育者というカテゴリーに加えられる状況にある。それに伴って、保育者の専門性についての議論も拡大する方向にある。

しかし、公共施設の集団保育をどう実践するかは、従来通り「保育者」の専門性の中核をなすものと指摘されている¹⁾。それどころか、公共施設の集団保育が急速に長時間・長期間保育へと歩を進めている現代において、その役割及び専門性の価値は益々上昇しつつあると考えられる。

そして、保育は身体的行為でありながら知的行為²⁾である。保育者の専門性は、保育者の保育行為の中に現れる。しかし、保育行為は身体

的行為であり意識化・言語化が難しい。保育の最中は、ひたすら、出会う子どもの側に身をおいて、そこで必要とされることに応えて動いている³⁾からである。保育行為に埋め込まれた保育者の専門性は、保育者自身でさえも気づきにくく、語りにくい側面がある。

このような保育行為に埋め込まれた保育者の専門性を明らかにすることを目的として、研究が行われてきた。その成果と課題を明らかにすることは、保育者の専門性を明らかにするために重要な課題であると考えられる。さらに、この課題に取り組む際、その研究をデザインする過程に難しさが散見する。研究デザインに焦点を当て、その動向を探ることが、課題解決に向けての第1歩となる可能性があると考えられる。

2. 研究動向

保育者の専門性についての研究動向は、すでに、松浦・熊井(2018)⁴⁾がレビュー論文を著しているため、それを踏まえることとする。松浦・熊井(2018)は、保育者の専門性について検討した文献を検討し、その結果、保育者の専門性

に関して、統一した見解は得られていないと指摘し、整理が必要との見解を示している⁵⁾。それを踏まえて、各種要領・指針の改定が行われた2008年と2017年に焦点を当て、それをまたぐ2007年から2017年の期間に、保育者の専門性を取り上げた論文を検討した。その結果、現状で把握が不十分であり、今後注目して育てていくべき専門性として、保育者の身体知、暗黙知と表現されている、言語化されていない保育者の専門性を挙げ、この専門性を言語化しようとする取り組みが必要と指摘している⁶⁾。

3. 研究目的

本研究では、保育者の身体的行為に焦点を当て、言語化されていない保育者の専門性の言語化を試みる研究の研究デザインの動向を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象の選択

データベースとして、CiNii（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ）を使用し、2018年より2025年3月までの論文を対象とした。

まず、保育者の専門性に関する論文の全体の傾向を探るために、保育者と専門性及び保育者と身体と専門性とのアンド検索を行った。次に、身体・からだ・身体知・身体性・身体行為・身体感覚・動き・動作・立ち居振る舞い・振る舞い・ふるまい・仕草・所作・表情・視線と保育者とのアンド検索を行った。さらに、前記の身体関連用語と保育者と専門性とのアンド検索を行った。

2. 調査時期

検索年月日は、2025年4月12日・13日である。

3. 調査内容

(1) 全体の傾向を把握する調査

保育者と専門性をキーワードとしたアンド検索では、393件の論文が検出でき、保育者と身体と専門性をキーワードとしたアンド検索では、13件の論文が検出できた。

(2) 身体関連用語との詳細な調査

まず、身体関連用語と保育者をキーワードと

したアンド検索を行った。その結果、抽出された論文は、身体285件・からだ30件・身体知3件・身体性7件・身体行為2件・身体感覚4件・動き196件・動作26件・立ち居振る舞い0件・振る舞い5件・ふるまい1件・仕草0件・所作1件・表情34件・視線24件であった。

次に、身体関連用語と保育者と専門性をキーワードとしたアンド検索を行った。その結果、抽出された論文は、身体13件・からだ3件・身体知・身体性・身体行為・身体感覚いずれも0件・動き6件・動作1件・立ち居振る舞い・振る舞い・ふるまい・仕草いずれも0件・所作1件・表情0件・視線1件であった。

その結果、件数の多い身体・からだ・動き・動作・表情・視線については、保育者と専門性のアンド検索で抽出された論文を選択し、件数の少ない身体知・身体性・身体行為・身体感覚・立ち居振る舞い・振る舞い・ふるまい・仕草・所作については、保育者とのアンド検索で抽出されたものを選択した。

その上で、重なり合う同じもの、意味の違うもの（居場所作りから所作を検出等）、学術論文の形式をとっていないもの（雑誌記事・学会の研究発表論文集等）、保育者を養成する上での授業実践を取り上げたものを除外し、保育者の日常的な乳幼児にかかわる保育行為の有り様に注目した学術論文を抽出した。

その結果、6件の分析対象となる学術論文を抽出することができた。

4. 倫理的配慮

本研究は、保育学研究倫理ガイドブックに基づき、実施した。

III. 結果

1. 抽出された学術論文の研究内容

抽出された学術論文の内容を、研究目的・研究方法・結果と考察・今度の課題について整理する。なお、それぞれの研究内容を表す際、「」で囲った部分は、それぞれの論文からの引用である。

田代（2018）⁷⁾は、「子どもの思いを分かりたいと願いながら」「子どもとかかわる中で、保育者がどのような経験をしているのか」を、保育者の「身体の働きを中心に読み解く」ことを目

的として、保育歴40年の保育者（学童保育）と「障がいをもつ子どもとのかかわり」を対象として、「非構造化インタビュー」・「対話式インタビュー」を行い、「現象学的看護研究の分析方法」を参考に分析した。その結果、「子どもとのやりとりにおけるA保育者の身体には、A保育者が身体に向ける意識との関係で3つの状態」があり、第1の状態は、「子どもの身体の動きに巻き込まれて自分の身体を意識できない、直接的に応答する身体」であり、第2は、「子どもの身体の動きに連動する間身体的な器官として子どもの思いを感じる身体」であり、第3は、「子どもの身体の動きに同調するように意識的に合わせていく身体」であること。そして「第1、第2の身体の状態が、第3の意識的な身体の状態を基づけて」おり「基づける下層の働きを目覚めさせるためには、意識的な身体の使い方が必要である」と示唆している。今後の課題は、「保育者が第3の状態としての意識的な身体の利用方をどのようにして身に付けることができるのかを明らかにする事」であると指摘している。

本岡（2019）⁸⁾は、「乳児が葛藤によって不快情動を表出し、それが保育者の葛藤を生むと共に情動の不安定さも露呈したエピソードにおいて、互いの葛藤がもたらす情動の機微と関係性の変容を検討することを通して、乳児保育における葛藤の意義を示すことを目的」として、「低年齢児保育にあたる0歳児及び3歳未満児保育における子ども」と補助保育者（私）を観察対象とした「関与観察」と「エピソード記述」を行い、「その時々働いていた互いの感受性を、志向性・身体性・応答性・共感性・養護性の5つの視点で分析した」。その結果、葛藤は、「乳児の保育者への愛着を形成すること」と「保育者の乳児への志向性を高めること」の2つの意義を持つこと、「葛藤の意義を生かすためには、保育者が乳児の身体性に対する感受性を高め、乳児を間主観的に把握しようとし続けることが重要」と示唆している。今後の課題として、本岡は明示してはいないが、「葛藤場面において保育者自身を支えるものの存在」について言及しており、これを今後の課題としている可能性はあるのではないかと推察される。

古賀（2020）⁹⁾は、「保育実践において欠くことのできない身体と状況に着目し、複数の文脈が絡み合う保育実践のダイナミック・プロセス

の中で発揮されている保育者の専門性を、身体的・状況的専門性として検討を行い、その特徴を明らかにする」ことを目的とし、施設長・主任・保育者（保育所・認定こども園・幼稚園）を対象として、インタビュー調査、質問紙調査、保育観察、対話的ビジュアル・エスノグラフィーを行った。その結果、「保育実践の中で自らの実践が不十分であると感じる保育不全感が、実践のとらえ直しやより繊細な感知を目指すことにつながり、次の実践における構えを形成すること、その構えがあることで実践時の教育的瞬間をとらえ、能動的に関わることが可能になること、さらには、課題が多発する状況において複数の教育的瞬間の感知がなされた場合に、保育者は、援助の同時進行性と時期選択を組み合わせた優先性の即応的判断を行い、現在の状況を相互行為的に形成している」と示唆し、続けて「保育実践に見られる保育者の専門性とは、身体的・状況的感知に何度も細やかに立ち戻り、また実践へと展開していくサイクルを能動的に生きることが核となっている」と示唆している。今後の課題は、「保育不全感の蓄積が深刻化するケースにおいて、言語化、共有化されない要因を明らかにすること、保育不全感を起点としない教育的瞬間の相互行為の詳細な分析を行うこと、子どもの年齢や保育の場面によって優先性の即応的判断にどのような特徴があるのかを検討すること」であると指摘している。

宮本（2020）¹⁰⁾は、「保育者はクラス活動にみられる幼児の表出を学期別にどの様に受け止めているのかについて、『幼児の視点/理解』と『停滞・混乱』の2つの観点から明らかにすること」を目的として、「4歳児のクラス活動」を取り上げ、「ナラティブ分析の手続きを参照して」「個別」に「学期ごとの振り返りを半構造化面接の形で実施した」。その結果、『幼児の視点への配慮』と『クラス活動に生じる混乱への対応』における保育者の4歳児の表出への意識や振る舞いの視点には、①集団の難しさや分からなさを引き受ける『集団の不明瞭性』に向き合っていくとする視点、②『集団内の保育者主導性』への留保を意識的に行う視点、③『個と集団の二項対立図式』を乗り越える視点、の3点の特徴が見られた。その中で、クラス活動での保育者の意識や振る舞いは、幼児の表出や参加姿勢を通して保育者が持つクラス活動の枠組み自体

を変容させていた。このように、クラス活動内での幼児個々の表出を捉えるために、保育者は揺れながら向き合っている姿勢が見られた」と示唆している。今後の課題は、「保育者や小学校教員の子ども理解に対する視点の違いを検討する」ことであると指摘している。

増山 (2020)¹¹⁾ は、「食行為を支える文化的道具の1つであるスプーンを、乳児がどのように自発的に使えるようになるか、その発達の過程とそれを支える大人の役割について」「子どもと保育者のスプーン仕様における身体的相互行為から提示する」ことを目的として、「対象児ができるだけ食事に集中できるよう筆者は同席せず、HDD カメラを固定設置し撮影」した。「その際、対象児と保育者の表情、及び食べているものや食具が映るよう配慮」しながら行った。「対象は、T児（生後7ヶ月から42ヶ月まで）・S児（生後9ヶ月から19ヶ月まで）・O児（生後7ヶ月から17ヶ月まで）・K児（生後7ヶ月から14ヶ月まで）とそれぞれの担当保育者」であった。その結果、「乳児がスプーンを使って食事をするようになっていく過程には、いくつかの段階があることが分かった。また乳児が自発的に食事をするようになる発達的变化の過程には、両者の身体性が強く影響していることが示され、保育者は乳児との共同的なスプーン使用を通して乳児の身体発達を捉え、身体的援助を少なくしていくことが明らかになった」と示している。

楊・多治見 (2021)¹²⁾ は、「熟練保育者の読み聞かせにおける思考プロセスの解明し（原文ママ）、読み聞かせの意味を明らかにする」ことを目的として、文献調査及び「40年の保育経験をもつ熟練保育者と保育者養成校3年生5名を対象に聞き取り調査を行った」。その結果、「読み聞かせは、保育者と子どもが絵本の世界に共に『生きている』からこそ意味がある。そのために、保育者は子どもの身体感覚や感受性をよく感じしかつ把握する。それと同時に、絵本のことばを子どもの身体感覚で読み直して、絵本の世界を再構成している。そのプロセスにおいて、ことばとからだの『ふれる/ふれられる』というダイナミックな応答が生まれてくると考えられる」と示唆している。今後の課題は、「養成校の教育では、単に技術にとどまらず、熟練保育者の活動を支える保育観や子ども観をいかに形成し、そのためにどのような学びが必要なのかを

問うこと」であると指摘している。

2. 研究デザインにおける現状と課題

(1) 該当する論文数における現状と課題

保育者の専門性に関して身体に焦点を当てた論文の割合は、保育者の専門性を論じる論文の3.3%であった。

(2) 用語の定義における現状と課題

抽出した学術論文を検討する中で、研究者によって身体関連用語の定義が明示されないことがあるということに出会った。

田代 (2018) は、子どもの身体の動きに、巻き込まれる・連動する・同調する保育者の身体を取り上げている。自身の身体の定義は明示されない。しかし、「現象学的な看護研究を参考にして」いるので、そこに依拠しているのではないかと推察される。

本岡 (2019) は、身体性を中田¹³⁾・須田¹⁴⁾に依拠して、「外の状況と一体となって感知し、感知したことを、身体を使って表出すること」と定義し、乳児の身体の動きに対する保育者の感受性を高めることが重要とする。また、本岡は、「身体の動き（身体性）」と表している。

古賀 (2020) は、身体を「保育行為を実現していく具体としての身体」と定義し、身体的を「身体で感知している言語以前のもも含めて、その専門的判断に活かしていくという性質を持つ身体の側面」と自身の定義を明示している。

宮本 (2020) は、保育者の意識や振る舞いを明らかにしているが、振る舞いという用語の自身の定義は明示されない。しかし、宮本は、「今回、クラス活動における4歳児の表出の変化に対する保育者の意識や姿勢を語りから検討したが、本文の保育者の語りは幼児の小さな変化を肯定的に語る中で、保育者の意識や関わりもまた変容していく動性を示していた」と述べている。ここから、宮本の考える振る舞いは、姿勢・関わりという言葉に近いのではないかと推察される。

増山 (2020) は、身体的相互行為に着目し、その行為は乳児と保育者の「両者の身体性が強く影響し」、保育者は「乳児の身体発達を捉え、身体的援助を少なくしていく」と述べる。それぞれの自身の定義は明示されない。しかし、増山は「フッサールの相互主観性の現象学の理論

等を参照しながら」としているの、そこに依拠しているのではないかと推察される。

楊・多治見(2021)は、「熟練保育者は、絵本に内在される身体性を子どもの身体感覚から読み直し、再構成することで、主観の意志だけに頼ることを防ぎ、相手との共通感覚を得ることにつながっている」と述べる。「絵本に内在される身体性」については、具体的な絵本を取り上げ、絵とオノマトペの観点より詳述している。子どもの身体感覚については、「保育者は子どもの感受性、感性といった身体感覚を感知しかつ把握することが重要である」と述べ、「身体感覚」を「感受性、感性」と言い換えている。また、「ここで注目したいのは、声・動き、擬声語、擬態語など保育者が用いる身体感覚で臨場感や躍動感、緊張感を表現する手法である」と述べ、「保育者が用いる身体感覚」の具体例として、「声、動き、擬声語、擬態語など」をあげている。このように、自身の定義は明示されないが、他所にて解説を加えている。

古賀は、自身の言葉で定義を明示している。本岡は、依拠する研究者の言葉で定義を明示している。田代・増山は、自身の定義は明示されないが、依拠する研究者を提示している。宮本は、自身の定義は明示されないが、文中で他の言葉に言い換えている。楊・多治見は、自身の定義は明示されないが、他所にて解説を加えている。

以上より、用語の定義の表し方には、研究者による差異があることが示唆された。

(3) 研究対象における現状と課題

田代(2018)は、子どもの思いを分かりたいと願いながら、障がいをもつ子どもとかわる保育行為を、本岡(2019)は、「低年齢児保育にあたる0歳児及び3歳未満児保育における子ども」を乳児とし、乳児と保育者が互いに葛藤する場面の保育行為を、古賀(2020)は、1歳児保育を取り上げ、「複数の文脈が絡み合う保育実践のダイナミック・プロセスの中で」保育者が「保育不全感」を感じる保育行為を、宮本(2020)は、4歳児のクラス活動において、子どもの表出を受け止める保育行為を、増山(2020)は、主となる対象であるT児については7ヶ月から42ヶ月の期間観察し、乳児がスプーンを自発的に使えるようになるという発達を支える保育行

為を、楊・多治見(2021)は、0歳児から5歳児までを対象とした熟練保育者の絵本の読み聞かせ場面における保育行為を取り上げていた。

以上より、研究対象とされた子どもは、0歳児から5歳児に加えて障がいのある子どもであった。

また、研究対象とされた保育行為は、研究目的との関連で選択されているため多様であったが、2つの観点より分類することができた。1つは、保育者と子どもの関係性からの分類である。この観点より分類すると、田代・本岡・増山は、保育者と子どもが1対1でかわることをイメージした場面の保育行為を、宮本・楊・多治見は、集団の子どもを1つのまとまりとしてイメージし、その子ども達にかかわる場面の保育行為を、古賀は、複数の子どもが自発的に自由に動き、関係が複雑に絡み合う状況の中で、選び行われる保育行為を焦点化していた。

もう1つは、時間という観点からの分類である。この観点より分類すると、時間で区切ることができる場面における保育行為と、時間では区切れずいつでも起こりうるもしくはいつ起こるかわからない場面における保育行為とがあった。前者は、増山・宮本・楊・多治見による食事場面・クラス活動場面・絵本の読み聞かせ場面といった場面における保育行為である。後者は、本岡・田代・古賀による子どもと保育者が共に葛藤を覚える場面・子どもの思いを分かりたいと願いながらかわる場面・保育不全感を感じる場面における保育行為である。

(4) データ収集方法における現状と課題

田代(2018)は、保育者(保育歴40年)への非構造化・対話式インタビューを行い、本岡(2019)は、当事者性を重視し、補助保育者(私)による関与観察とエピソード記述を行い、古賀(2020)は、インタビュー調査、質問紙法、保育観察、対話的ビジュアル・エスノグラフィーを行った。宮本(2020)は、学期終了毎に、保育者への個別・半構造化面接を行い、増山(2020)は、研究者は同席せず、固定カメラで、対象児と保育者の表情、食べているもの、食具が映るよう撮影し、保育者との相互行為がよく観察されたデータを収集し、楊・多治見(2021)は、熟練保育者の読み聞かせの特徴を先行研究に基づいて整理し、熟練保育者(保育歴40年)と学

生への聞き取り調査を行った。

増山 (2020) は、あえて参与しないで機器による映像撮影により、本岡 (2019) は、当事者性を重要視し、研究者自身が当事者として関与し観察した記述により、田代 (2018)・宮本 (2020)・楊・多治見 (2021) は、保育後の保育者へのインタビュー、面接、聞き取りにより、古賀 (2020) は、インタビュー調査、質問紙法、保育観察など多様な手法でデータを収集したのち、保育観察と直後にその時の実践の映像を共に見ながらの保育者へのインタビューにより、データ収集をしている。

身体的行為は、暗黙知とされ、意識化し言語化することが難しいとされる。それを言語化するために、多様なデータ収集方法が、研究者により選択されている。特に、保育者へのインタビュー、面接、聞き取りといった、保育者に保育実践に対する振り返りの言語化を促し、それをデータとして収集する手法が多く使われている。

(5) 保育者の微細な身体的行為における研究デザインの現状と課題

様々な身体的行為が取り上げられているが、その中には、微細な保育者の身体的行為である仕草は含まれていなかった。

IV. 考察

1. 該当する論文数における現状と課題について

身体的行為は、そもそも意識化が難しい。それをさらに言語化する試みには、困難が予想される。そのため研究が少ないことが推測される。しかし、保育者の専門性の中核を担う身体的行為に対する研究は必要である。研究が活発に行われることが期待される。

2. 用語の定義における現状と課題について

研究者自身にとっては、身体関連用語とはそれぞれ何かという問いは自明とされ、説明の必要をあまり感じないということが考えられる。また、自身の言葉にまで言語化することには、多少の困難が生じるのかもしれない。しかし、研究デザインを立案する際、特に重要なのが研究の「理論的枠組み」であり、「理論的枠組み」とは特定の学問的方向性を持った概念や用語、

定義、理論に立脚した研究の足場とも言えるもの¹⁵⁾と指摘されている。つまり、キーワードとなる用語の定義は、研究の足場¹⁶⁾として必要と考えられるのである。残念ながら、用語の定義が明示されず、それぞれの研究者の解釈の範囲にとどまる場合、その微妙な差異が障りとなり、他の研究者による研究内容の理解が難しくなることが懸念される。

身体関連用語が研究者自身の言葉で言語化され、できる限り明示されれば、他の研究者との重なりや違いが捉えやすくなる。その結果、それぞれの立場を踏まえながらのコラボレーションが容易になることが期待される。

3. 研究対象における現状と課題について

研究対象として、現在日常的に保育施設で保育対象と考えられる子どもたちが満遍なく取り上げられている。年齢及び障がいの有無による焦点化が行われ、性・国籍等を含む他の観点による焦点化は見出されなかった。社会変化とともに、新たな研究対象として焦点化される可能性が推察される。

研究対象とされた保育行為を、保育者と子どもの関係性から分類した場合、取り出されたのは、いずれも保育者のねらいに基づき、日常的な保育の中で実践されている保育行為であった。ある関係性が特化して選択されているという傾向は現れなかった。保育実践は、個とともに集団を捉えて行われる。子どもは、他の子どもと出会い、仲間集団を自ら創り出す。この仲間集団と保育者の関係性を捉えた研究が見出せなかった。ことに現代では、保育の場は、子どもたちが集団を経験できる貴重な場として機能している。この点を考慮し、子どもが創る仲間集団を捉えた保育者の専門性に関する研究が期待される。

研究対象とされた保育行為を、時間を観点として分類した場合、時間で区切ることができる場面における保育行為は、1日の中での実践を予想することができる、言わば日課と考える場面の保育行為であった。保育は1日の中に多様な質の保育場面を含み込んで構成されており、それぞれが異なるねらいをすでに持っている。それらの中から、各研究者が研究目的に沿って、ある場面を研究対象として選択し、そこでの保育行為を検討していると推察される。ある場面

が特化して選択されているという傾向は現れなかった。と同時にこれらの研究を総合すると、保育の1日が検討されていることとなる。しかし、これらの場面と場面をつなぐ保育行為に現れる保育者の専門性への言及は、本研究では見出せなかった。検討が期待される。

時間では区切れずいつでも起こりうるもしくはいつ起こるかわからない場面における保育行為は、1日を見通し、葛藤・願い・不全感という保育者の心の働きや状態に基づいて取り出されている。保育者の心は、「心もち」「思い」などとも呼ばれ、保育実践の要と考えられている。保育者の身体的行為を、保育者の心とのかかわりに注目して検討することは、より深く保育実践を捉える可能性があると考えられる。

加えて、保育者は常に他の保育者とチームを組んで保育を実践している。保育者同士の身体的行為をも含み込んだ研究が期待される。

4. データ収集方法における現状と課題について

データ収集方法における保育実践への研究者の参与度には差異があるが、研究目的との関係によって選択されていると考えられる。つまり、研究として実施可能な一定の幅の中から、自分の研究デザインに最適な形式でデータ収集ができるような研究方法を選択する¹⁷⁾ことが行われているのである。

これらの研究において、保育者の言語化されていない暗黙知を言語化するために、保育者へのインタビュー、面接、聞き取りは有効なデータ収集方法と考えられていると推察できる。しかし、研究者のインタビュー、面接、聞き取りへの参与方法への言及はわずかであった。どのような方法が有効か、検討が期待される。また、現在の保育研究について保育者にインタビューを行い、その分析結果をまとめた質的研究が数多くあるが、これらの論文では、子どもや保護者との関わりそのものを分析しているというよりは、むしろ、ナラティブを手掛かりとして保育者の認識枠組みを探った上で、保育者のあるべき姿について論じられていることが多いとも指摘されている¹⁸⁾。研究目的と研究方法との整合性をさらに吟味することも求められる。

5. 保育者の微細な身体的行為における研究デザインの現状と課題について

現在の保育研究について、実際の保育・子育て支援の場面における微細なふるまいの一つひとつを専門的知識・技術の反映したものとして捉え、丁寧に観察して記録をとり、そのメカニズムを明らかにして、ある程度まで再現可能な知識・技術として示していくことも、価値の探究と同様に、重要な研究課題ではないかとされている¹⁹⁾。保育者の微細なふるまいの一つである仕草は、鈴木・岩立(2010)により取り上げられている²⁰⁾。しかしそれが唯一であり、それ以降の学術論文は本研究では見出せなかった。仕草は、保育者の専門性を捉えていく上での新しい視点として期待される。

以上より、保育者の身体的行為に焦点を当て、言語化されていない保育者の専門性の言語化を試みる研究が、多様な研究デザインのもと進められているという現状と抱える課題とが明らかとなった。それを踏まえて、さらなる研究デザイン検討の重要性が浮かび上がったと考えられる。

暗黙知の解明は一筋縄では進まない。ましてや複雑な集団保育の状況を踏まえた研究の進展はどうすれば導き出せるのか。言語化が難しい専門性を研究する手法の検討は、さらに進めていく必要があると指摘される²¹⁾ように、研究デザインに関して、新たな工夫や開発が求められる。特に現代において求められている、子ども主体の保育実践を研究する手法の開発が期待される。さらに、導き出された保育者の専門性の現れである身体的行為をなすことができる保育者養成のあり方を明らかにすることも課題である。

残念ながら、本研究において、身体的行為に焦点を当て、言語化されていない保育者の専門性の言語化を試みる学術論文を、数多く見出すことができなかった。本研究で除いた学術論文の中にも有益な情報が残されている可能性がある。そのため、さらに文献調査の範囲を広げ行うことが必要と考える。

【付記】

本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はありません。

【謝辞】

稿を終えるにあたり、編集にご尽力をいただ

きました編集委員の方々に心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 小川博久 (2011) 展望「保育」の専門性 保育学研究 第49巻第1号, 102
- 2) 津守真 (1997) 保育者の地平 ミネルヴァ書房, 214
- 3) 津守真 (1997) 保育者の地平 ミネルヴァ書房, 216
- 4) 松浦淳・熊井正之 (2018) 乳幼児にかかわる保育者の専門性に関する2007年から2017年までの研究動向 青森中央短期大学研究紀要, 第31号, 85-109
- 5) 同上, 89
- 6) 同上, 106
- 7) 田代和美 (2018) 保育者は子どもの思いをどのように感じているのか—障がいをもつ子どもとのかかわりについての保育者の語りから— 日本家政学会誌, Vol.69 No.7, 515-525
- 8) 本岡美保子 (2019) 乳児保育における葛藤の意義—乳児と保育者の相互作用に着目して— 保育学研究, 第57巻第3号, 44-56
- 9) 古賀松香 (2020) 保育実践に見られる保育者の身体的・状況的専門性 白梅学園大学・短期大学学術リポジトリ 博士論文(子ども学) 1-6
- 10) 宮本雄太 (2020) クラス運営における保育者の意識や振る舞い—クラス活動で4歳児の表出に向き合う保育者の語りの分析— 福井大学教育実践研究, 第45号, 43-52
- 11) 増山由香里 (2020) スプーン使用における乳幼児と保育者の身体的相互行為と食行為の形成 質的心理学研究, 第19号 No.19, 68-82
- 12) 楊奕・多治見里美 (2021) 熟練保育者の「語り」から考える絵本の読み聞かせの意味—ことばとからだの関係に着目して— 現代教育学部紀要, 第13号, 15-27
- 13) 中田基昭 (2013) 子どもから学ぶ教育学 東京大学出版, 55-148
- 14) 須田治 (2017) 感情への自然主義的アプローチ—自閉症スペクトラムへの発達支援— 金子書房, 2-113
- 15) 柴山真琴 (2017) 質的研究の計画—実行— 報告における質の検討 保育フォーラム <テーマ>保育学の研究方法論を考える (1) 保育学研究, 第55号第3巻, 107
- 16) 同上, 107
- 17) 同上, 107
- 18) 二宮和子 (2017) 保育・子育て支援の実践現場におけるナラティブと研究視角 保育フォーラム <テーマ>保育学の研究方法論を考える (1) 保育学研究, 第55号第3巻, 119
- 19) 同上, 119
- 20) 鈴木幸子・岩立京子 (2010) 幼稚園の帰りのあいさつ場面におけるルーティン生成の過程—3歳児の分析から— 保育学研究, 第48巻第2号, 74-85
- 21) 前掲10), 6

Trends in the Professionalism of Early Childhood Educators

—Research Design Focused on Physical Practices—

Kazuyo KUSANOBU

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】 This study aimed to elucidate trends in research design that focus on the physical practices of early childhood educators and attempt to verbalize the unspoken aspects of their professional expertise.

【Methods】 A literature search was conducted using the CiNii database (Scholarly and Academic Information Navigator, National Institute of Informatics) from 2018 to March 2025. Keywords included “body”, “corporeality”, “embodied knowledge”, “physicality”, “physical practices”, “bodily sensations”, “movement”, “actions”, “behavior”, “demeanor”, “gestures”, “bodily expressions”, “facial expressions”, and “gaze”, combined with “childcare provider” and “professionalism” using “AND.”

【Results】 Few studies met the inclusion criteria. It was noted that definitions of body-related terms were often not explicitly stated, varying research subjects and data collection methods were employed, and that there was limited reference to subtle physical actions, such as gestures.

【Discussion/Conclusion】 These findings highlight the need for thoughtful research design in exploring the physical practices of early childhood educators and in articulating the tacit professionalism of childcare providers.

【Key words】 professionalism of early childhood educators, physical practices, research trends